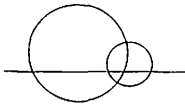


〔講演会〕



## 東亜同文書院に入学した京都府出身者

～明治・大正期の京都府費生を中心に～

愛知大学東亜同文書院大学記念センター ポスト・ドクター 武井義和

【司会】 では時間の関係もありますので最後の発表にさせていただきます。次はうちの記念センターのポストドクターをやっておられる武井さんのほうから、特に地元京都との関係で、府県費生というのがございましたけれども、たとえば京都なら京都府が負担して書院に学生を送るというような、その動きを、京都ではどんな動きがあったのか、それから京都には東亜同文会の支所ができたことがございます。その辺の話を中心にお話をさせていただきます。

【武井】 ただいまご紹介にあずかりました武井でございます。よろしくお願いいたします。今日の私のテーマなんですけれども、明治・大正期に限定しまして、京都府から府の予算をもって東亜同文書院に派遣された派遣学生、いわゆる府費生を中心に扱っていきます。その中で派遣をめぐる京都府会の議論、そして予算設定などを浮き彫りにしていきたいと思います。中には府費生以外の身分で入学した学生もいるので、そうした学生についてもところどころ取り上げてまいりたいと思います。なお時間が限られておりまして、お手元の私のレジメをご覧くださいとちょっと枚数が多くなってございますので、ところどころ早口でお話をさせていただくこともございます。その点予めご了承ください。

ではまず基本的なところからお話をしてまいります。最初の入学生が第1期生、明治34年の入

学でした。最後の入学生が第46期、昭和20年の入学でした。卒業生は先ほどの小崎先生のお話にもありましたように5,000名にのぼります。「東亜同文書院章程」に「第一府県費生を採り」とあるように、東亜同文書院は学生の入学に際し、各府県からその予算で派遣される府県生の採用を第1に考えていたことが分かります。そのあとを読んでいますと「次に定員に照し余地あれば公費生を採り尚余地あれば私費生を加ふ」とあります。ここで公費生や私費生も出てきますが、公費生というのは企業や団体などがその予算でもって東亜同文書院へ派遣する学生です。そして私費生とは今の大学生同様に、学費を自分で納めて入学する者でした。ここでは東亜同文書院が府県生を中心に学生の採用を考えていたことを指摘しておきたいと思います。

さて、東亜同文書院に入学した京都府出身者は、府県生、私費生などを全て含んで計算していきますと、明治・大正期に30名いました。昭和期になると71名の青年が京都府から東亜同文書院に入学していきます。ただ昭和期は、東亜同文書院が大学に昇格したあと、予科と学部に同一人物が入学しているというケースもありまして、それも含めて数えているんですが、いずれにしても明治から昭和までだいたい101名の京都府出身者が同文書院で学んでいたということになります。

この図1は、明治34年から大正8年までに入

学した府県費生の数を地域別に分けたものです。図3までの地域別内訳は、愛知大学短期大学部の教員でいらっしゃいました佐々木亨先生という方がまとめたものでして、それをここでは借用しているのですが、本報告で主に当てはまるのが図1の時期でございます。この図1の時期について言いますと、近畿地方はかなり派遣数が少ない地域となっています。近畿地方に所属する各府県をさらに細かく見ていきますと、京都府の派遣はかなり少ないです。下から2番目に少ない地域でした。一方、図2について言いますと、これは大正9年から昭和14年までの府県費生の派遣数を示したものです。図2の時期は、北海道や東北、関東、北陸などの地域の派遣数が減少しましたので、相対的に近畿地方の派遣数が多いという状況になっております。しかしながら京都府は、図1の時期と同じく下から2番目に府費生派遣が少ない地域でございました。逆に図3は、図2と同じ頃に私費生の数を示したもののなんですが、近畿は九州・沖縄地方に次いで2番目に多い数になってます。この私費生数は大正・昭和期は大阪府、兵庫県と並んで、私費生派遣の同列1位でした。したがって、京都府は私費生の入学者が近畿地方でも多い地域だったんですね。

ここから、京都府の場合、大正半ば以降は府費生よりも私費生として同文書院に入学する学生が顕著である、そういう傾向が浮かび上がっていることを指摘しておきたいと思います。これについて私も、愛知大学に所蔵されております学籍簿を実際に調査して確認をしております。興味深い事実としまして、この学籍簿を見ていくと、第34期、昭和9年の入学生以降、京都府からの府費生は皆無と言っていいほどになります。昭和17年から19年に若干確認できますが、圧倒的に私費生としての入学者であります。ではなぜ昭和期に入ると府県費生がほとんどなくなるまで減少したのか、また京都府会の議論はどのようなものであったのかということが問題関心として浮か

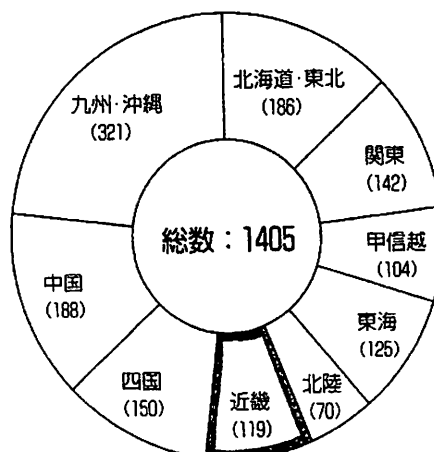


図1 東亜同文書院への府県派遣入学者の地域別内訳 (第1期～第19期)

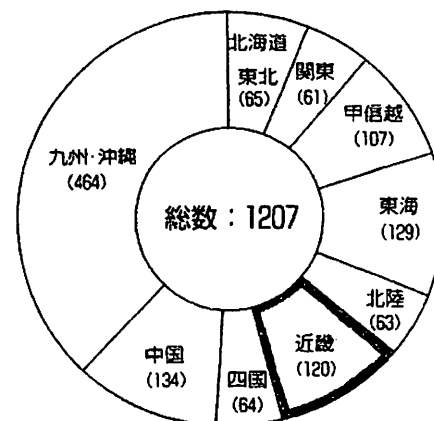


図2 専門学校時代の東亜同文書院への府県派遣入学者の地域別内訳 (第20期～第39期)

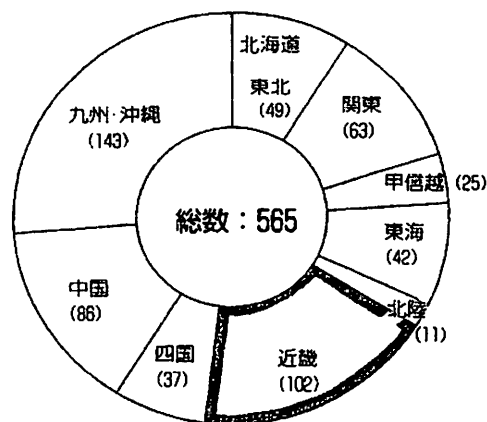


図3 私費入学者の地域別内訳 (第20期～第39期) (『同文書院記念報』VOL.11より)

び上がります。しかし今日のテーマから外れるので、これらの点については今後の課題としたいと思います。

さて、明治・大正期に入学した30名の学生が、どの入学期にどれだけ入ったか、そしてその学生が入学する時の身分はどうであったかという点について、触れておきたいと思います。表1は、これらの点について学籍簿をもとにグラフにしたものです。成績表にしか名前が載っていないような学生も実は若干いたのですが、それは表の中でカッコ書きにしています。この表の中で「費別区分」というところをご覧くださいますと、「京都府」と書いてあるのがお分かりいただけると思いますが、この「京都府」と書いてあるのが府費生を意味します。見ていきますと第1期から第5期までと、第11期、そして第20期以降に京都府費生が目立っていることが分かるかと思います。また、京都府の地図を付けておきました。こちらの地図は、30名の府内出身地域を示したものです。こ

の地図上で太く囲んである地域が、同文書院入学者の出身地です。北は宮津市、舞鶴市から、京都市はもちろん、南は宇治市、そして井手町といった、各市や町に及んでいることが分かります。

表1 東亜同文書院に入学した京都府出身者数と費別区分

入学期	入学者数	費別区分	入学者全体数
第1期	6名	京都府2、京都市3、私費1	79名
第2期	2名	不明2	99名
(第3期)	(2名)	(不明2)	68名
第4期	3名(うち1名)	京都府2、(不明1)	87名
第5期	2名(うち1名)	京都府1、(不明1)	102名
第11期	1名	京都府	81名
第14期	1名	船井郡教育会	102名
第15期	1名	私費	105名
第16期	1名	宇治郡教育会	123名
第20期	3名	京都府1、外務省1、私費1	141名
第21期	1名	京都府	118名
第22期	2名	京都府1、私費1	113名
第23期	1名	京都府	113名
第24期	1名	京都府	119名
第25期	2名	京都府1、私費1	118名
第26期	1名	京都府	111名

出典：東亜同文書院学籍簿、成績簿（愛知大学教学課保管）。

注1：出典をもとに、報告者が表に編集し直した。

注2：カッコの人数は、成績簿でしか氏名記載が確認できない学生の数を表わす。

注3：第16期の入学者全体数は、実習生8名を含んだ数である。

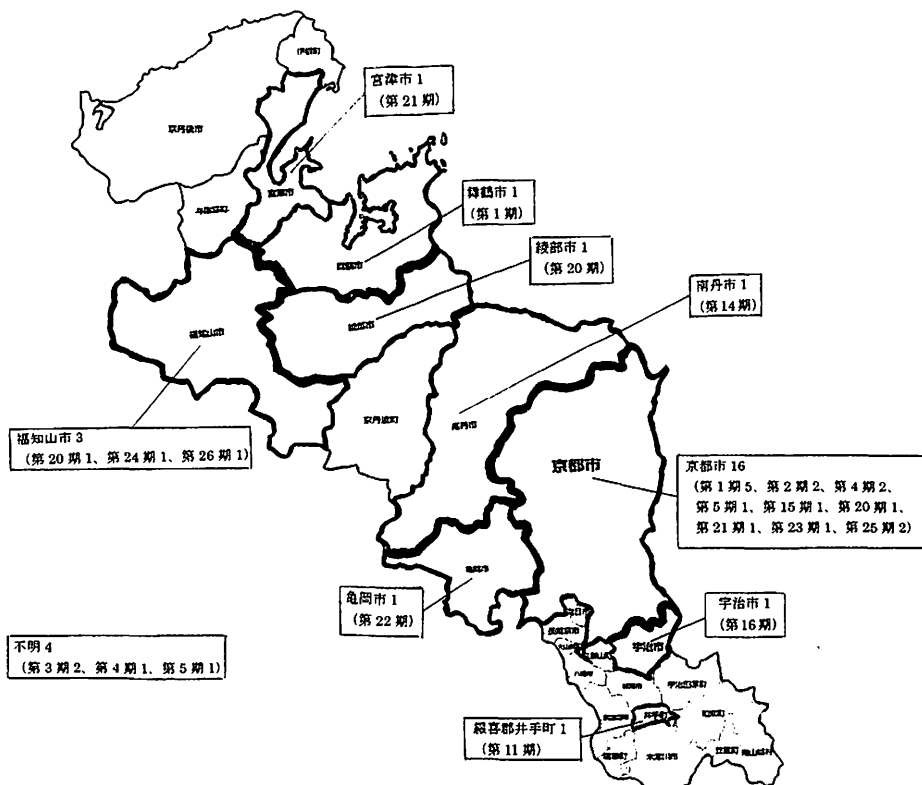


図4 京都府出身学生の出身地域と人数



次に、京都府議会における明治・大正期の府費生派遣をめぐる動向について、京都府議会の動向などを中心に見ていきます。まず特徴として、この時期の京都府費生の派遣は2つの特徴が挙げられます。まず1つは時期区分ができるということです。京都府費生は必ずしも毎年継続して派遣されていたわけではありません。この点について時期を追って見ていくと、「派遣、中断、再開」という経過をたどっていることが浮かび上がります。そうしたことから、「初期派遣期、中断期、再開期」という時期区分になるかと思えます。そして2つ目の特徴としまして、府が制定した東亜同文書院への派遣規則が、大正時代になって初めて登場したということです。しかもそれは東亜同文書院だけを扱ったものではなくて、日露協会学校、これは谷先生のお話にもございましたハルピン学院の前身ですが、その日露協会への派遣と一体化した規則、それが大正時代になって初めて制定されたということが挙げられます。それに伴って、東亜同文書院と日露協会学校に派遣するための府の予算が初めて大正時代になって明確化されたということが、特徴として挙げられます。

ではそれぞれの特徴について順番に、「初期派遣期」、「中断期」と、時期を追って見ていきたいと思えます。初期派遣期に該当する明治34年の予算は歳出臨時部の中の教育補助費というもので設定されておりました。これが同文書院への派遣に関わる費目でした。明治34年度には3,060円という金額が設定されていて、京都教育会補助と東亜同文会留学生派遣という形で費目が分かれておりました。ですがこの当時、学生派遣の選抜、そしてその学費支払いというのは、実は京都教育会が全て負担していました。もともと京都教育会というのは、府内における教員の養成、そして府内の教育の普及というのを目的として誕生した組織で、主にそういった活動を行っていた団体だったんですが、この当時は、京都教育会が同文書院に派遣する府費生の選抜試験をやったとい

うことであります。そのために府も、学生派遣のために京都教育会に予算を付けて、その予算でもって学生を派遣するというシステムをとっておりました。他の府県ですと、直接その府県が県庁などで選抜試験をやって、採用した学生に学費を付けて送り出すというのが一般的でしたので、こうした団体を通じて学生派遣を行なうのは極めて特殊なケースでした。

しかし明治35年度になりますと、原案4,540円に対して3,980円という形で減額されていきます。その理由は東亜同文会への学生派遣をやめるために修正したということであります。そのあたりの京都府会における議論について、明治34年12月2日の「京都府通常府会議事速記録」第9号で確認しておきます。まず名誉職参事会員の堤弥兵衛が、明治35年度に4名を派遣する案を出します。それに対して片岡健之助が、2名でよかろうと言うんですね。結局、この片岡の言うとおりの減額された予算が京都府会で議決されていくんですけれども、その理由として片岡は、各実業団体からも、またあるいは府の自治団体からもそれぞれ派遣することになっているため、これらの分は減じておきたいと述べています。つまり府以外の派遣元が存在するために、その分の予算をカットするというわけです。実際に第1期生の派遣では京都市が独自に3名を送り出しておりますが、京都の実業団体が派遣したという事実は学籍簿等からは確認できませんでした。しかしこの実業団体が派遣することになっているという一文は、当時の京都の実業界も東亜同文書院に注目していたことの表れと言えます。実はこの当時、京都府の弁護士、医師、そして京都帝大教授といった知識人や、西陣織、友禅染などの織物を中心とする経営者、実業家など、特に京都を代表するような実業界の人々の多くが、東亜同文書院の経営母体であった東亜同文会の京都支部、京都に設置された東亜同文会京都支部の会員として参加していたんです。この名誉職参事会員の堤弥兵衛は、本職は

砂糖商でしたが、実はこの時期、今申した東亜同文会京都支部のメンバーでした。したがってこの実業団体云々という記述は、実際に学生を派遣したかどうかは別として、この当時の京都実業界が同文書院に関心を示していたという動向の一端を示している記述ではないかというふうに思われます。

明治44年の第11期生までの府費生について見ると、府の予算配分設定、そして派遣に関する予算項目は非常に不明瞭です。当初の派遣項目は先ほど述べたように歳出臨時部・教育補助費という形で設定されていたんですが、その後明治44年度までの予算設定がどうであったかというのは不明瞭で、分からない点が多いです。その点、愛知県を例に出しますと、愛知県は明治35年入学の第2期から毎年継続して愛知県費生を派遣しております。愛知県会では、歳出臨時部・教育補助費という、京都府と同じ形で予算を設定していました。その中で、清国留学生派遣補助費という明確な形で、愛知県の場合は予算設定をしております。それが明治・大正とずっと続いております。その点を考えてみますと、この初期派遣期における京都府の予算設定というのは、さらに細かく調査していくテーマであると私的には思っております。

す。

ところで、第6期から第10期まで、すなわち明治39年から明治43年まで、東亜同文書院には京都府出身者が全く存在しない時期でした。実はそうした中であって、京都府会では、学生を派遣しようという議論が一時期出たことがあります。明治41年12月14日の京都府通常府会で、稲本源兵衛という人物が「なぜ京都府は学生を同文書院に派遣しないのか」という質問を出しております。それに対して昌谷彰事務官が派遣の必要は認めつつも、「該書院へ生徒を出す必要ありとせば尚ほ他に農事上にも水産上にも更に各国の言葉をも研究せしむる必要あり」と述べています。つまりいろんな学問を学ばせる必要があると言っております。そして続けて「猶語学のみならず実際の学問をも各国にて研究せしむる必要を感じるも是等留学生を出すにせば際限なし 要するに差当り東亜同文書院へ生徒を出す必要ありと認めず」と回答しております。これは裏を返せば留学生の期待、そして世界的な視野で学生派遣を捉えていたということなのでしょうけれども、こうした理由で東亜同文書院への派遣を見送ったということはかなり特殊なケースではないかと思われま

表2 京都府通常市部会における派遣に係る予算

大正9年度	歳出経常部、第5款教育費・第1目留学生費	940円	前年度0円。	①専院・日露協会学校1名ずつ、学資月額平均35円、旅費・支度金1人平均50円。
大正10年度	同上	2,095円	前年度1,155円増。	①専院学資1,100円：月55円・1人1年分、月55円・1人8ヵ月分。 ②日露協会学校学資850円月35円・1人1年分、月35円・1人11ヵ月分。 ③旅支度代100円：1人平均50円、2名分。 ④試験委員手当45円、⑤広告料45円。
大正11年度	同上	4,155円	前年度2,060円増。	①専院学資1,980円：月55円・1年分で計3人。 ②日露協会学校学資1,980円：月55円・1年分で計3人。 ③旅支度代100円：1人平均50円、2名分。 ④試験委員手当45円、⑤広告料50円。
大正12年度	同上	4,135円	前年度20円減。 (④⑤の額減少のため)	①専院学資1,980円：月55円・計3人。 ②日露協会学校学資1,980円：月55円・計3人。 ③旅支度代100円：平均50円、2名分。 ④試験委員手当30円、⑤広告料45円。
大正13年度	同上	4,845円	前年度710円増。	①専院学資2,640円：月55円・計4人。 ②日露協会学校学資1,980円：月55円・計3人。 ③旅支度代150円：平均50円、3名分。 ④試験委員手当30円、⑤広告料45円。
大正14年度	同上	4,895円	前年度50円増。	①専院学資2,640円：月55円・計4人。 ②日露協会学校学資1,980円：月55円・計3人。 ③旅支度代200円：平均50円、4名分。 ④試験委員手当30円、⑤広告料45円。

出典：「京都府通常市部会議事速記録」大正8年第3号37頁、大正9年第3号29頁、大正10年第2号16～17頁、「京都府通常市部決議録」大正8年36頁、大正9年36～37頁、大正10年37～38頁、大正12年36～37頁、大正13年38頁（以上、京都府議会図書館所蔵）。

注1：出典をもとに、報告者が表に編集し直した。



しかしこうしたやりとりの後、先ほどの質問者の稲本源兵衛から建議書案が出されます。この建議書案は、京都府会において全会一致で可決されまして、翌日京都府会議長名で京都府知事宛に出されます。そこには「支那に於ける政治経済其の他諸般の事情を知悉するは我国将来の発展上最も必要なるを認む 依て明治四十三年度に於て東亜同文書院へ府費を以て留学生を派遣せられんことを希望す」と書かれております。おそらくその影響でしょうか、明治44年に第11期生として1名留学していることが確認できます。しかしながらその後も学生派遣は途絶えてしまいまして、19期生まで存在しません。それがなぜかということは謎の1つなんです。この第12期から第19期まで、明治45年から大正8年までは、府費生派遣の中断期と捉えられます。

やがて大正9年になりますと、再び東亜同文書院への派遣が見られます。そしてそれと共に予算がしっかりと設定されていきます。また派遣規則も初めて制定されます。ただこれは最初にお話した通り、大正9年に初めて行なわれた日露協会学校への派遣と合わせての規則制定、予算設定であったということを申し上げておきます。ではその予算はどういう設定であったのかというところが表2に関わってきます。時間の関係もありますので、少しペースを上げてお話ししていきますが、大正9年に京都府会に設定されていた支部会という部会の予算として設定されていきました。そして歳出経常部の中の教育費、さらにその中の留学生費という形で、しっかりと予算が明確にされていることが分かります。最初は940円だったのが、大正10年には2,095円、そして大正11年以降は4,000円台という推移をたどっています。大正9年から11年のあいだに予算が増加したのは、東亜同文書院そして日露協会学校の学費が上がったために、その分派遣にかかる予算も上がったためであります。

ではなぜ大正9年になって、再び東亜同文書院

に派遣されるようになったのか、合わせて日露協会にも派遣されるようになったのか。それを示す資料が大正8年12月11日の「京都府通常市部会議事速記録」に載っております。これは横山理事官の発言ですが、「留学生費を初めて計上して同文書院と日露協会学校へ学生を派遣したいという考えを持っている」と述べております。続けて「我が国の将来経済上の発展が西比利亜（シベリア）並に支那地方に於て最も必要であると云ふことは申し上げるまでもないことであります、従つて之に対して将来密接なる関係を造つて置くことと云ふ必要があると考へまして、…成るべく此地方と本府との間にも密接なる経済上の関係を造りたい」と言っています。ここに当時の京都府側の、同文書院そして日露協会学校に学生を派遣する思惑が示されております。この発言が見られた大正8年は第1次大戦が終わった年ですが、ちょうど第1次大戦期に日本の経済は急成長し、輸出額が増大しました。中国への日本企業の進出が盛んに見られた時期でもあります。またこの年は、日本軍のシベリア出兵が開始された時期でありますので、こうした近隣諸国地域と日本との関係を踏まえて、これらの地域にビジネスチャンスがあるという認識があったと思われます。ちなみにこうした横山理事官のような認識は、愛知県や九州地方の県議会においてもあったようですので、学生を派遣した各府県に共通するものであったと思われます。

一方、学生派遣の規定である「東亜同文書院日露協会学校派遣生規定」は京都府立総合資料館に所蔵されている『京都府公報』で確認できますが、時間の関係もあるので主なところだけ見ていきます。横線を引いておきました第7条には、学費支給の方法について載っています。そして特に第13条なんですけれども、知事が卒業生に対して一定期間、条文には5年間とありますが、その期間は仕事を指定することがあると定めております。卒業生に対する一定程度の拘束力を持つ性格

だったことが分かりますが、知事がどのように卒業生の就職を定めたのか、実際に指定された学生がどれほどいたのかというのは、ちょっと資料で確認できないので分かりません。

では最後に、ご当地京都から明治・大正期に同文書院に入学した 30 名の中で、主な卒業生として第 1 期生の遠藤保雄、高島大次郎、そして第

20 期生の福井保光という、この 3 名の人物を紹介しておきたいと思います。遠藤保雄は現在の舞鶴市に生まれ、日露戦争に出征したのち、満州である地域の知事の顧問を務めました。またその知事のご家庭に入って子供達の教育にも携わったと言われています。そして明治 40 年から中国中部の武昌という町にあった陸軍学堂という、軍人を養



遠藤保雄



福井保光



高島大次郎と家族

(3 名の写真は愛知大学東亜同文書院大学記念センター所蔵)

成する西洋式の学校教育機関で教官を務めました。法律、政治、経済、会計、簿記などの一般経理に関する科目を担当しております。また将校集会所というところでも、ヨーロッパ戦史、中国外交史、そして戦時国際法などを教えております。その後大正時代に京都で就職しまして、その会社の上海支店開設に携わっているんですが、短期間で辞めまして母校同文書院の学生監として赴任しています。

高島大次郎も同じように同文書院卒業後、中国南部の雲南省で3年ほど、日本語学校の教師を務めております。昭和57年に出版された『東亜同文書院大学史』には雲南総督の顧問として5年留まったと書いてありますけれども、彼が母校同文書院で明治41年に語った「雲南絶談」という談話によると、今申したように雲南省で日本語教師を務めていました。帰国後その実績と経験を満鉄に買われまして、旧満州南部の営口という町に開設された営口商業学校の創立に参画します。そこで校長として十数年ほど中国人子弟教育に携わったという人物であります。

20期の福井保光は外務省から派遣された公費生で、現在の綾部市の出身です。彼は外交官として中国各地を赴任するのですが、昭和20年2月、マカオ領事に赴任していた時、中国人の一団に射殺されました。これについては森島守人という、敗戦時まで外交官だった人物が著した『真珠湾・リスボン・東京一統一外交官の回想』（岩波書店、昭和25年）に書かれておりますので、詳しくはそちらを（関係する文章は5頁ほどですけれども）ご覧いただきたいと思います。簡単に触れますと、福井は満州に赴任していた時、在留同胞にも親しまれた温厚な人物であり、決して中国人から個人的な恨みを受けるような人物ではなかった、射殺の背後には政治的動機が含まれているような気がしてならなかったと記しております。この福井マカオ領事の暗殺というのは非常にミステリアスな事件ですが、時間の関係もありますので、この事

件については森島の著書に譲るという形にせざるを得ません。

以上、明治・大正期に入学した京都府費生を中心にお話ししてきました。この京都から輩出された彼等、そして彼等を教育した東亜同文書院という学校に興味・関心を持っていただけたら幸いでございます。いろいろと私論という形で私個人としましても申し上げたいことが間々あるんですが、時間が来ましたのでここまでといたします。ただ最後に一言だけ申しますと、本報告の準備のため6月に2日間にわたりまして京都府議会図書館で京都府議会速記録、決議録を閲覧させていただきました。その際に資料を何度も出していただきまして、またお忙しい中を何度もコピーをお願いしてお手を煩わせたにも関わらず、大変親切に対応してくださいました京都府議会図書館の井本敏子様に、厚くお礼申し上げたいと思います。井本様後ろにいらっしゃいますね。大変お世話になりました。ありがとうございました。この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

時間の関係もありまして早口になってしまいましたが、私の報告はここまでとさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

**【司会】** はいどうもありがとうございました。実は時間が大変延びてしましまして、このあとここを会議に使いたいというのがありまして、すぐに終わってくれという連絡が入っています。したがって全体の発表時間が短くなってしまったんですけど、書院42期生の三田良信さんにちょっとだけお話をさせていただいて、それでこの会を終わらせていただきたいと思います。大変申し訳ないんですけど、もしご質問される方は終わったあと、発表者の方がまだ表のほうにおられますので、そこでお願いします。

**【三田】** 三田と申します。金沢からまいりました。突然予定外のお話をさせていただくことになりま



した。実は資料の展示室に荒尾精先生の書幅を展覧してございます。これは昨年の11月に金沢市の旧家野村さんのお宅で偶然に私が発見いたしました。少し長くなるとあれですので、実は6月に出ました同文書院記念報18号に、私が依頼されてその発見の経緯について詳細に書いておりますので、ぜひお求めいただいてお読みいただけたらありがたいなと思います。大変不思議な因縁を感じるんですけども、2004年に京都の若王子、明日追悼会の持たれる若王子に、このような荒尾先生の石碑がございまして。これは下から上まで5mほどあります。2004年に私はこれの拓本を取りにいきました。機械を使って、3人がかりで2日間かかって拓本を取りました。今これは霞山会に収まっておりますけれども。大変に長文で、これは私がその拓本をもとに写し取ったものでありますが、1行に70字あり、本文は22行にわたって書かれております。これほどの大きな石碑は日本でも非常に珍しいと思います。機会があったらぜひこの荒尾先生の碑をご覧になって

ください。これは先ほどもお話がありましたように近衛篤磨公が文をお書きになって、中国から当時外務省で来ておられました陝西省の総督の升允<sup>しょういん</sup>という外交官の方が素晴らしい楷書で書かれています。ぜひご覧になってください。私が金沢で発見しましたのを、偶然この7月の初めに私に譲るからというお話がありまして、それを譲り受けまして、今回学校のほうへ寄贈いたしました。今朝電車に乗って持ってきてまいりまして、早速そちらへ展示させていただきましたので、ぜひお帰りに見てください。終わります。

**【司会】** どうもありがとうございました。大変恐縮ですけど、碑と書幅をぜひご覧になっていただいて。だいぶ時間が押してしまいましたので、今日は質疑応答できなくて申し訳ありませんけれども、まだ発表者もおられますのでまた表のほうでお聞きいただければと思います。後半大変急ぎまして。これで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。